

思い出の中から

飯野竹二郎

芦高も今年で二十周年になったという。私の在職当時十五周年の祝をしたばかりと思っていたのに早いものだ。それにしても十五年史を編さんして置いたことはよかったことだと、当時の関係者の労を改めて感謝する。

何か書けということだが、ここには十五年史に書きもらした一、二を拾い、後日のために書いて置くことにする。

フル・コン・ピアノの購入について

講堂の新装については、十五年史に詳しく記してあるので、ここではステージ分の拡張のことだけ書く。何分狭いので何とか工夫はないかと考えた末、東の控室と階段をつぶしてステージにあてることに決意し、県が構造上困難だということをやっとな承認させ、現在のようにした。これで六十六平方米ほど広くなったわけだが、出来て見れば別に雨ももらず、体裁も悪くない。

講堂の内部設備については、県は一文も出さぬので、育友会の御世話にならねばならなかった。諸設備のうちピアノは奮発してセミコンを買うことになり、私と音楽の出口君とが浜松の日本楽器に出張して調査することになった。会社の案内でいろいろ視察しているうち、全国から五台ほどの受注で、目下製作試験中というフル・コンを見たところ、素人目にもなかなかよく、垂涎措くあたわざるものがある。これらは今来朝している独逸の世界的ピアノニスト・ウイリアム・ケンブ氏の演奏会の際、全国七カ所ほどに配置使用してから引渡すことになっているとのこと。当時兵庫県にはまだフル・コンはなく、

近畿にも三台程度とのこと。私はその話を聞きながら、高校にフル・コン備付一番乗りの野心が油然とわいて来たので、会社に向い、ケンブ氏が試弾済だと云うが、最上と折紙をつけたこの一台は何処の演奏会へ持って行くのかと尋ねたところ、近畿会場たる宝塚大劇場だとのことにつき、それではケンブ氏折紙付の分を是非芦高へ購入したい、がどうか切り出した。会社は他からも非公式にそんな話を受けているが、まだ確定していないから確約するなら応諾するとのことにつき、急ぎ母校の上役員会に報告した結果、宝塚分に限るという条件付で、万場一致購入に決定したので、この旨確答契約を完了したのであった。ところがその後間もなく、和歌山県立公会堂竣工に伴ない、是非宝塚の分を備付けたいから譲歩してくれとの話があり、其他からも引張りだになり、会社も困ったようだったが、当方は既に契約済み理由に変更出来ぬと、頑張り通し、宝塚の演奏会後他に奪われぬうちと、早々に引取ってやれやれとホッとしたりわけ。宝塚演奏会当夜は私も出口君も宝塚に馳せ参じ、終了をまって会社の人と同道、舞台上にケンブ氏を訪ねて握手をかわし、貴下の初演奏にかかる折紙付このピアノを、芦屋高校に備付けられる幸運と榮譽を得たことを、無上の喜びとする旨を述べ、その場でケンブ氏の署名をピアノにいただいた次第であった。このピアノのひき初め演奏会には、日本ピアノニストとしての第一人者井口基成氏を招き、次いで声楽の大家柴田睦陸氏を招くなど、名譽あるフル・コンにふさわしいスタートを切ったことであった。

其後年月もたち、今では諸君のうちにも、芦高にかかる名譽あるケンブ氏署名入りのフル・コンピアノがあって、全国同好の士の垂涎的のとなっていることを知らぬ者もあるようだから、念のためその由来を書いて置く。

芦高図書館新築にまつわる裏話

図書館新築については、阪部前校長から引き継ぎを受け、私の着任早々の仕事であった。すでに県の予算は取ってあったが、それも四教室増築予算となっていて、ここから何とかひねり出さねばならない。当時県はまだ教室の増築に追われ図書館の建築などは全然考えておらぬし、県下の高校でも戦前に建てたもの一、二を除き、戦後新築は皆無であった。しか

し自発的学習や自由研究のため、高校に図書館は是非必要である。そこで私は社会科の特別教室に充当するという理由をつけ、二教室分一六五平方米を、図書館の機能を具備する設計として県に交渉した。県もはじめは何だとかかんだとかいって承認しなかったが、終には変な特別教室だねと苦笑しながら承知することになった。ところが芦屋が県費で図書館を建てたというので、他の学校がやいやい県に迫り、県もその処置に困ったようであったが、これが先例となり、豊岡高其他にもほつぽつ県費で出来るようになった。私は他校に対しても功德を施したと思っている。後から出来た分は敷地がゆっくり取れたり、青友会費を補足したりして、規模も大きく、十年後の今日では芦高の分も余り自慢にならぬが、建築当時は小規模ながらスマートで近代的設備を誇るものとして、各地からの視察も多く、うらやましがられたものである。



青年は意気の子である。全校に元気がみちあふれた時代は、勉強に運動にすべて立派な成果があがる。意気消沈した時はしょんぼりとしてすべてに駄目である。このことは私の廿余年にわたる学校経営の体験が立証している。初代山本校長は「土地柄ということを最も考慮の中心として質実、剛健」を提唱し、「素直にして明朗な青年」に仕立てるとともに、健康の増進を重点として「かなりきびしい鍛錬の方策」を取り入れたと云っているし、二代阪部校長は芦高退職の際「本校のスポーツが衰える時、それは本校々風の衰微する時である。体育運動を盛んにすれば、気力も盛んになり、学問も向上するものである」と云い残されている。

私も在職五年間、これらの精神を継承して先生方とともに努力した積りである。幸に生徒諸君の奮励精進により、明ら自由な学園にふさわしい活潑な活動を展開し、運動面のみならず、文化面においても県下はもとより、全国的に名門校に比肩する立派な業績の数々を挙げ得たことを、今でも愉快に回想する。

硬式野球部の全国優勝は云わずもがな、軟式野球の近畿優勝、サッカー・ラグビー夫々の近畿優勝から国体出場、山岳部の国体連続出場、水泳部の国体出場、硬式庭球の川廷を頂点とする全国的活躍、軟式庭球や卓球部の県下優勝から近畿・西

日本・全日本と広域の大活躍、拳斗部の活躍等々、今でも感激新たなものが胸をおどらせる。

文化面でも弁論部の山村・長田・大隅・鈴木・徳矢・平等の諸君が全国の高校生を相手にして素晴らしい成績、牧野の二科入選などを頂点として、各部とも活潑な活躍振りは、今でも目に見るようである。